

週日の説教

金 大烈 神父 2010年7月22日(木)

《愛するためには、まず自分が愛されること》

今日の福音(ヨハネ 20・1 2、11 18)は、特に感動的な箇所ですね。

さて、アメリカの第40代大統領に俳優出身のロナルド・レーガン(Ronald Wilson Reagan)という大統領がいました。その時代、国家安全保障補佐官として任命された人物、そしてジョージウォーカーブッシュ(George Walker Bush)大統領時には国務長官までやったコリン・パウエル(Colin Luther Powell)がいます。聞いたことがありますよね。そのコリン・パウエルとレーガン大統領との間の逸話をご紹介します。

その頃、レーガン大統領と内閣は、時間をかけて何かの政策に取り組んでいました。レーガン大統領は、「内閣が計画を立て、ある程度策が出来たら話し合いをしましょう。」という指示を出しました。具体的に何の政策だったのかは分からないのですが、とにかく内閣は準備をしました。そしてパウエル補佐官がレーガン大統領に、「このような計画を立てました。これは必ず成功しますので、許可してください。これを行えば、必ず国民からよい評価を得られると思います。」という説明をしました。しかしレーガン大統領は、この策には危険があり、失敗するだろうと予想できたようです。「私は無理だと思います。実施しないほうがよいでしょう。方向を変えましょう。」と言いました。しかしパウエル補佐官は、「これは必ず行わなければなりません。内閣全員の意見ですから、間違いはないと思います。」と強く勧めました。

そこでレーガン大統領は、数日間よく考えました。その後、内閣全員を呼び寄せると、「あなたがたの意見なのだから許可します。実施しましょう。」という決定を下しました。しかし1か月も経たないうちに、その政策は失敗であったことが明らかになりました。世論は厳しくなり、失敗を責める話があちこちから出て来ました。レーガン大統領は記者会見を開き、「この政策は間違いだったので、やり直しをします。」という発表をしました。会見の最後に、ある記者から「この政策を大統領に勧めた長官は誰ですか。」という質問が出されました。その時、レーガン大統領は迷わずに「これは全て私が考えました。私の責任です。」と答えました。その質問を聞いたパウエルは、息苦しかったでしょうね。そして大統領の答えを聞き、「この方のためならば、私は何でもする。」と思ったそうです。政権が終わった後の回顧録の中にそのような話が書かれています。

感動的な話ですね。責任を問い詰められたら逃げたくなるのは人の心の常ですよ。しかし、このように答えるレーガン大統領を見たら、政治の勉強をしないで大統領となった彼が、実はどのくらいの心の持ち主だったのか分りますね。

さあ、福音の話に入ります。私たちはよく「子どもの時に親からたっぷり愛をもらった人は、親になった時に、自分も子どもをそのように愛することができる。」と言いますね。これは、「愛された体

験の強い人は、自分がもらった愛を他の人に伝えようとする人柄になる。」ということです。そして聖書を読むと、マグダラのマリアがとても強く、イエス様に愛された体験を持っていたことが、よくわかりますね。

『人に配慮すること』、『人を愛すること』は、そんなに易しいことではありません。私たちは「人を愛さなければならない、愛さなければならない。」と言いながらも結局「人から愛されること。」「人から配慮されること。」を望んでいます。いつも「愛されること」を期待して、人との関わりを持つとうとしているのです。けれども人生全体を見て、愛されたことがない人は、存在しないと思います。愛されたからこそ、今まで何か善いことをしようとしてきたのです。つまり、人からしてもらいより、自分がしてあげようとする心を持つためには、まず自分がたくさんもらいながら生きてきたことを、強く意識しなければならないのです。人にしてあげられない人が多いのは、自分がもらった記憶を忘れてからです。

私たちは信仰者ですから、何よりもまず、イエス様からどのくらい愛されているのか、愛をいただいて生きているのかが意識できなければなりません。それができれば、いろいろなつらいことが起こっても、感謝の一日にすることができるようでしょう。そして、意識しなくても困っている人に自然に手を伸ばせるでしょう。他人のために手を伸ばし、愛し合おうとする心をつくるためには、私たちがどのくらい愛をいただいて今まで生きてきたか、それをよく考えなければならないと思います。

マグダラのマリアは、その意識が強かったのだと思います。「イエス様が新しい生き方をさせてくれた」という強い体験をいつも胸に置いていたのです。だから、みんなが怖くて逃げた時にも、1人でさまよいながらイエス様を探したのでしょう。その心を私たちも少しでも分らないといけないと思います。

ありがとうございました。